
迷宮の果て

今西薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮の果て

【Zコード】

Z6502D

【作者名】

今西薫

【あらすじ】

異世界に呼び出された4人は、姫君を救つて旅を終えようとしていた。危険はほとんどなく、ちょっとしたロールプレイングゲームのような楽しさを味わつたのだが、旅を終える直前に、記憶が消されることを知らされる。記憶が無くなるということは、現実世界で4人が出会つても、誰一人として気付くことができないということ。だから、記憶を持ったまま元の世界に戻るには、迷宮を抜けなければならぬ、という条件を4人は飲んだのだった。

「」の砂漠を越えるとすぐです

姫君がためらいがちに言つたのは昨日の晩のことだつた。森の端に着いてすぐの時だつたんだけど、砂漠を越えるのに約一日かかるので一泊してからの出発になつた。

朝から一日歩いて、陽はだいぶ酉に傾いているけど夕方にはまだほど遠い。とはいへ、それでもまだ砂漠の端は見えない。

本当だつたのかなあとちらりと姫君を見ると、どことなく憂鬱そな雰囲気を身にまとつていて、不安をもつた。

「あ

声を上げたのは松永くんだつた。

「見えた。お城だ」

一番背の高い松永くんは眼鏡の奥の瞳を細めて地平線を見つめている。

「ああ、本当だ」

やよいさんもうなずく。

「えーっ？ 見えない」

あたしは悔しくなつて早足でとにかく前に進む。

「おーっ。見えた見えた」

藤川くんまで見えたらしい。

一番背の低いあたしにはまだ見えない。歩きにくい砂の上をそれからしばらく進んで、砂と空の間に小さな点を発見した。更に進んでそれがお城の塔だと気が付いた。

「あ……」

ようやく、着いた。そう思つた。やつと終わるのだ。」の長かつた旅も。

あたしは振り返る。他のみんなもこちらを見ていた。

お別れの時が来たのだとみんなが気付いていた。本当はここ数日間。もしかすると、お姫様を救け出でからずつと思つていた人がいるかもしね。

「もうちょっとだね。がんばろつー。」

あたしは手を振る。

現実の世界に戻つても、また会える。名前を知つてゐるし、みんなの通つている高校だつて聞いた。住んでいるところだつて、これら聞けばいい。旅は終わるけど、あたしたちはもう一緒に過ごせないけど、まるつきり知らない人になるわけではないから。

苦笑してゐる三人が追いつくのを待つて、あたしは言つた。

「ねえねえ、どこに住んでるの？ 住所教えて」

「おまえ、覚えられるんの？」

「え？ 紙に書いたのつて持つて帰れないんだっけ」

姫君は一瞬の間を置いてうなずいた。

「うーん。いい。死ぬ氣で覚える。んで、絶対あたしから連絡いれるの」

握り拳を作つて言つと、藤川くんが「はいはい」なんて返事をした。

「まあ、そうよね。未緒ぐらいなもんよね、連絡してくれるのは「やよいさん」がくすくす笑う。

「そーじやなくてつ、あたしがしたいからするの。待つてゐんじやなくて、連絡して、自分から会いに行くためにするの」

「まあ、いいんじやないの？ 一人ぐらいそういうマメなのがいても」

松永くんはクールだ。

「いや、こいつの場合単に友達がいないという……つてえ、殴るこないだろ」

「いい加減に人のいうコト信じなさいよ。べつにねえっ、友達がないから、今の関係を保つていてこうなんて思つてないもん。友達

はちゃんといふもん。……ああもおつなんて言つたらいいのかなあつ

「つまく言えないのでもどかしい。

「判つてゐるわよ

「ほんほんとやよいさんはあたしの頭をたたいてあたしを追い越していぐ。

「大丈夫。石野さんが連絡してこなかつたら藤川がするだらうし」

松永くんはくすくす笑つて横を通りしていく。

「まあ、たぶんな

藤川くんもにやにや笑う。

「ひつどおいつ。みんなしてからかつてつ

「それはカン違ひだらう? 石野さんをからかつてたのは藤川一人だ。」

「あつ、松永するい」

横をすれ違いざまにほんつとひとつ頭をはたいて藤川くんまで追い越していく。あたしは、頬を膨らまして振り返つて、三人の背中にあかんべをしようとした。けれども、ゆっくり歩いてくる姫君の表情が気にかかつてそれを途中でやめた。いつもなら、こんな会話のやりとりをくすくす笑つて聞いている姫君が今日は本当に憂鬱そうにしている。

「何か心配ごとがあるの?」

他の三人に聞こえないようにあたしは聞いてみた。

かすかに目を見開いた彼女は、小さく首を横に振る。

「申し訳ありません

まいつたな。どうしたんだろうか。

言いたくないことや、言えないことは勿論あるのだから、強要はできない。だから、理由を話してもらおうとまでは思つてはいなかつた。ただ、ここのところ沈みがちだった姫君を笑わせたかったのだ。他の三人があたしを追い抜いていったのは、あわよくば理由を聞き出してこいということなのだろうけど、おバカなあたしが姫君

のそばにいる方が、彼女の気が楽だろうと判断してのことだとも思う。

「理由を聞こうなんて思つてもいないけど、話して樂になるんならいつでも聞くからね」

「未緒さん」

あたしたちは見つめあつ。姫君の青い瞳は話したいことがあるのだと言つていいようなのだけど、瞳の語ることなんて、たかが知れている。

「なんだか、女同士で見つめあつて不毛よね？」

あたしの言葉に、姫君はかすかに笑みを浮かべた。なんとかがんばつてという印象を持たなかつたわけではない。でもあたしはそれでよしとした。彼女は彼女なりに、あたしたちに心配をかけさせまいとしているのだ。

「ああ、行こいつ」

陽が西に傾いて、あたしたちはよしやく門の前にたどりついた。街をとり囲む城壁の入口は木でできた大きな扉で遮られていて、その先には進めない。

「おい、どうやつて入るの？」

藤川くんが姫君に訊いた。あたしたちはバカみたいに門を見上げたままの姿勢で、もちろん藤川くんも同じ姿勢で、振り返りもしないで言つてはいる。けれど、期待した返事はなかなか返つてこない。

「おーい、姫さんや」

待ちきれずには藤川くんが振り返つて、つられてあたしも振り返つた。視線の先には俯いた姫君がいた。

「姫様、どうしたの？」

あたしも訊いた。もともと、箸が転がつても笑うようなタイプの女の子ってわけじゃないけど、絶対変だと思った。魔王の城から救けだしてからここまで三か月。それでもにっこりと笑っていたのだ、

助けだした直後は。それが、ここ数日間沈んでいる。

「この扉を開けるには条件が必要なのね」

やよいさんが言った。

「まあ、だらうね」

松永くんが同意した。

つてことは。

「なるほど」

藤川くんでなくとも、あたしにも判る。やよいさんの言葉は当たりなんだ。

姫君は意を決したように顔を上げた。

「申し訳ありません」

それは肯定のための文句だった。

「その通りです。この門を開けるには条件が必要なのです」

「俺たちや、あんたを助けてやつたんだよな」

藤川くんが脅迫めいたことを口にして。

「開ければ帰れるのに、開けるのには条件がいるなんて、極悪非道ね」

やよいさんは髪をかき上げて、美女特有の冷たい視線を姫君に注ぐ。

「それが、捷なんです。そういうしつみになつてるんです」

「俺たちがここに呼び出されて帰るための条件といふことか」

松永くんが妙に判つたようなセリフを言つ。やよいさんと藤川くんはあきれたように彼を見て、姫君に視線を戻した。

「約半年旅をしてきて判つたんだけどね」

仕方ないという感じで、松永くんが説明を始めた。

「この世界では、魔法という俺たちにとつては不可思議なものがまかり通つていいけど、それにはちゃんと法則があるんだ。決まった法則を守つて正しい道筋で手順をふんだ結果が魔法みたいに見えるだけで、なんら不思議なことじやない。たとえばテレビだ。あんなもの、どういう原理だと説明されても判らないヤツには判らないけ

ど、生活の一部になつてゐる今、驚くヤツはない
「だからそれがどうしたつてこいつんだよ

藤川くんはとても短気だ。

「つまりさ、俺たちをここに呼びたための魔法は、元の世界に帰すまで一つの魔法で、帰すためにはまだ手順が残つてゐるんじゃない
つてことだよ

「それが？」

「……姫君。何をすればいいんですか？　俺たちは

「……」

松永くんはじっと答えを待つ。

「……てぐださー

「え？」

「忘れてください。ここであつたこと、すべてを

「なるほど」

呟いたのは松永くんだった。

「あなたがたがここに呼び出された際に、魔術師が説明したことと
思いますが、これは一夜の夢です。あなたがたにとつては、一夜の夢
なのです。半年という時間は長すぎます。あなた方はとても順調に
進まれた。だから半年ですんだ。けれども、そうでない方たちもい
らっしゃいます。一年や、一年。中にはもつと長い方もいらっしゃ
います。その間中、あなたたちの世界で眠つていただいているわけ
にはいきません。だから、一夜の夢と同じようにするのです
「夢だつて、覚えてこむことはある」

あたしが言つた。

「忘れちやつたら、目が覚めたら、みんなのことを忘れちやつたら、
会つても判らないってことだよね

「ええ……」

「そんなの嫌だ

「未緒

「藤川くんは、イヤじゃなーの？」

ああ、イヤだな。涙が出てくる……。

「あたしは嫌だ。思い出は、今までの半年は、大切な宝物なんだから。忘れてしまつたら、なかつたことになつてしまつ。夢なら夢でもいいのにつ」

両の拳を握りしめ、あたしは言つ。

「姫様のことだってそうだよ。せつかくお知り合いになれたのに、忘れるなんて」

「でも、もう会えないのですから」
「関係ない。知つてて会えないことと知らないことは全然違うことだもん」

ぽんぽんと頭をたたく手がある。これは松永くんだ。人のことをペツトかなんかだと思つてゐんじゃないかつてたたき方だ。

「よしよし、判つたから、もう落ち着いて。俺に考えがあるから」「ふうん……」

やよいさんが妙に感心したように言つ。

「忘れずにすむ方法があるんだろう? 姫君」「松永くん」

見上げる松永くんの表情はやけに真剣だ。

「何もない、この扉の前で言わなければならなかつたといつことは、この中に入れば、覚えたまま帰る方法もあるといつことだろ? なん違つかい?」

姫君はうつむいたまま首を横に振つた。

「けれど、それは簡単なことではない」

「……ええ」

「それでもね、俺たちは聞きたい。残念ながら俺は石野と同じ意見なんだ」

「まあ、俺もね」

藤川くんが軽く右手を上げる。

「あら、同意見ね」

腕組をしたままでやよいさんが言つ。

「……どうして……」

姫君は信じられないといつぱりにあたしたちを見た。

「さあ、どうしてだらうね」

藤川くんはにやにや笑っている。

「よほどバカなんだらう?」

姫君はそれでもしばらく躊躇つた。それからようやく口をひらいて「もしかすると帰れなくなるかもしません」と言つた。

「扉のむこうには街があります。街は迷路になつていて、城までたどりつけたらあなたがたは記憶をもつたままお帰りになることができます。無理だと判断されたら街の者にお申しつけください。記憶を消してからお帰しします」

「帰れなくなるつていうのは?」

松永くんがしつかりとチェックを入れた。

姫君はうつむいて首を左右に振る。

「街に留まる人達がいるのです。街に留まることを決めた場合、迷宮を抜けるための地図が手に入ります。そのかわり、一生帰れません。この街で年を重ね、この街で生を終えます」

「地図があるのか……」

「ええ、でも。地図を見て城まで辿りついたとしても記憶は失われます。街の人達にきいたとしても同じです。自らの手で、辿りついてください」

「よく判らないな。街に留まるところこれが」

松永くんは眼鏡を人さし指で押し上げながらそう言つた。

「私にも、判らないんです。……私には、あなた方が、ここでの記憶を失いたくないと思つても理解できません」

「どうして?」

「ここでのことは、まるで役にたちません。あなた方が、あなた方の言つところの現実の世界に帰つたところで、ここでの体験はなんの役にたつのでしょうか。話したところでただの夢物語のはずです。私には、判りません」

「もう一つ。俺たちは四人だけど、一人が城への道を見つけたら全員帰れるのかな」

「ええ。それはかまいません」

「あと、留まりたいと思ったものが一人いたとして、そいつだけ残ることはできるのかな」

姫君は意味が判らないというように首を傾けた。

「ええ……。でも、どうしてそんなこと」

「いや。……システムに興味があるんだ」

松永くんは言い訳するように言つてあたしたちを見回した。

「さて、どうする？ 俺は入るつもりだが、君たちに強要はしない

「同じくね」

やよいさんは苦笑する。

「俺も行くよ」

藤川くんも言つと、あたしを見る。

「もおつ、みんな忘れてない？ 最初に記憶を消されるのは嫌だつて言つたのはあたしなんだからね」

みんなが微笑む。

「と、いうことだ。姫さん、頼むよ。この扉の中に入れてくれ」

「判りました。扉の中に入つたら、外には出られません。街に留まり、この世界の住人になつて初めて、城壁の外に出ることができす。覚えておいてください。……では」

姫君が扉に手を触れる。扉は低い音をたてて、少しづつ開いていく。

「気がつけば、太陽はすでに沈んでいて、あたりは暗くなつていて。あたしたちは顔を見合させた。表情はよく見えなかつたけど、みんなが笑つているのは判つた。」

「さあ、行こつ」

あたしが言つと、藤川くんが背中を叩いてくれた。

ばたんと大きな扉が閉まり、あたしたちは城壁の中に入った。姫君はいない。間接的にでも道を教えることはできないと言い、別のルートで帰つていったのだ。

城壁の中は、外よりは多少明るかつた。
正面に道が一本まっすぐのびていて、城の塔のあたりまでありそうだった。左右にも道が一本ずつ。どうやら、とても整然とした街並みらしかつた。

「これが、迷路……」

もつと、複雑怪奇な街並みを想像していたのだけれど。

「迷うわけないよなあ……」

藤川くんが疑問符をつけて松永くんに言った。

「隊長、指示は？」

そう訊いたのはやよいさんだ。とても正しい呼び方だ。

「とりあえず、動くな」

動かない方がいい、ではなく動くなといつのが、ちょっと切羽詰まつた感じがする。

「真っ暗だねえ……」

あたしは空を見上げる。せめて宿屋には泊まりたいと思つんだけど。

「動く時は、みんな一緒だ。今日はここでキャンプが正しいな」

「腹がへつたな……」

「用意しよう。隊長、どの範囲なら動いていい？」

藤川くんが、背負っていたリュックをあらす。

「確かめよう。ここは、多分、そんなに安心していい所じゃない

「どうやって？」

「小石を拾つて、投げて。消えなかつたら、そこまでは安全だと思つていい

わけが判らない。

「こ」の状況で、城まで迷わず行けると思わない奴がいるか?」

藤川くんとあたしが首を横に振る。やよいさんは、じつと松永くんを見ていた。

「でも姫君は「こ」を迷路だと言つた。迷りつけないとも言つた。といつことはだ、この道をまっすぐ歩いても城まで迷り着けないといふことだよな」

「うなづく。

「なぜだ?」

「邪魔が入るとか」

藤川くんが言つ。

「それは迷路ととは言わないな」

「まっすぐに見えてまっすぐじゃないってこと? あれは蜃氣楼とか」

「それも可能性の一つだ。だつたら、まだ楽だけどな

「わかんない」

「空間が曲がっているところ」と?」

やよいさんが咳くように言つた。

「多分な。調べたわけじゃないからなんとも言えないが、きっとそうだ。だとしたら、無闇やたらと歩き回るのは得策ではない。暗いうちに歩くのも同じだ」

だから松永くんは「動くな」と言つたのかと納得がいった。

「もちろん、違うかもしれない。だが、どこか知らない所に移動させられてからそうだったことが判つても遅いんだ。だから、気をつけろ」

あたしたちは神妙な顔でうなづいた。

「こ」の半年でキャンプをするのも馴れてしまった。常に一人ずつが持ち歩く大きな布とロープ、最低限の食料と水、道具類があればこででも野宿ができる。もともと藤川くんがそういうことに詳しか

つたということもあるけれど、松永くんの機転の早さというか頭の良さ、やよいさんの料理の腕と器用さが役立つたと言つてもいい。

あたしたちは半年前にこの世界に招ばれた。この街の城の中の大きな円が床に描かれていた部屋に突然現れた。直前の記憶は自分の部屋で、ベッドの中に入つて目を瞑り、明日の学校のことを考えながら眠ろうとしていたことだつた。なのにあたしは見たこともない服を着て、知らない人間が三人もいて、知らない所にいた。呆然としている中、一早く納得したように「成程ね」と呟いたのが松永くんだつた。彼以外の三人がその理由を聞いただそうと彼の顔を見た時に、扉が開いて老人が現れた。老人は、まるでゲームの世界の住人のようなことをのたまつた。

「姫君を救けてください。勇者の皆様」

というセリフに呆然としたのはあたしと藤川くんだ。やよいさんはそこで納得したように「ああ」と呟いた。

「我が国の姫君が東の山の魔王にさらわれました。どうかお願ひします。姫君を救けてください」

なんでも、魔王に対抗できる魔法というのがないということで、対抗できる力を他の世界に求めた結果、あたしたちが集まつたといふことらしい。あたしたち四人の個々のキャラクターには関係なく、このくらいの力が欲しいと注文したら、勝手に四人来てしまつたのだそうだ。つまり、松永くんが料理ができる器用だったならば、やよいさんはいなかつたかもしれないわけだ。

そして、結局そういう話になつた。救けないと元の世界には帰れないというのだから、仕方ない。一晩の夢と同じで、元の世界では時間が進んでいないというのもOKした理由の一つだつた。

旅を始めてそれぞの特技が判つてくると役割分担ができてきた。松永くんがリーダーで藤川くんが野営準備をしてやよいさんが食事の用意をする。魔王の城の中に忍びこむのも松永くんと藤川くんの二人が計画をたてた。松永くんは旅の途中で興味を持ったこちらの世界の魔法を覚えて使い、藤川くんは格闘技で敵と戦つた。

旅はとても順調だつた。魔王の城へ辿りつづまでも、姫君を救いだすまでも、この街への帰り道も。ケンカもしたし、困難もあつたけど、総じて順調だつた。門の外で姫君が言つたよつこ。それでも考えなかつたわけではない。

あたしは、どうしてここにいるんだらつへ。

「未緒」

「気がつくと手が止まつていた。

「何、ぼーっとしてゐるの」

やよいさんがあ手を差し出していた。あたしは慌てて食事用のカップをだした。お茶用、スープ用の便利な道具だ。

「うん。最後の最後でどんどんがえしーつて奴だなあつて思つて」「まあね」

うなずいてやよいさんはカップにスープを入れてくれた。

「でも、ま。おこしそぎのからな、このは話」

「藤川くん?」

「最初の話であつただろ? ケガや病氣で死ぬことはまずないつて。これじや、ゲームと変わりないからな。誰だつて条件呑むんじやないの?」

「元の世界にまつたく影響がないつてこのは、まあおこしい話だよね」

松永くんもうなずく。

「うますぎる話には裏があるとは言つねど」

「そういう意味じや、あつても悪くないじんぐん返しつて奴だよな」「やうかなあ」

「小説やまんがや映画でこのまま終わつたら、絶対つまらない」と思つて、俺は

「だつて現実じやない」

「そう思つてゐるけどね」

「松永くんは違うっていうの」

「覚えていたら、現実だろうね。忘れてしまったら、やはり現実じゃないだろう。だから、現実にするためにここに来たんだから仕方ないさ」

「そーゆーことだよ」

藤川くんは松永くんに同意した。といふか、最初からそういう意見だつたんだけど。あたしはやよいさんの方を見た。

「やよいさんは？」

「未緒には悪いけど。姫君が言いだした時、やつぱりつて思わなかつたわけじゃない」

「じゃあ、するいつて思つたのは、あたし一人なんだ……」

あたしが呟くと三人は笑つた。

「そーだらうね」

代表してやよいさんが返事をしてくれた。

「でも、ああまできつぱり言つてくれなかつたら、私も、松永も藤川もきつと迷つてたからね」

「そうそう。未緒のあの思いつきりの良さは俺たちの方位磁石みたいなんだから」

「つまりね。石野さんは自分の言つたことでこいつ結果になつたとか考えなくともいいんだよ。俺たちは嫌だつたら反対したし、この中に入らずに帰ることを選ぶことも可能だつたのに誰一人それを選ばなかつたんだから」

入る前に、松永くんは姫君にちゃんと訊いていた。あたしたちはそれを知つていた。

「うん」

あたしはうなづく。でも、松永くんはせっかく気をまわしてくれたけど、あたしが考えていたのはそんなことじやなかつた。関係はあるけど。でも、問題はそこじやなかつた。

あたしは火を見る。今朝、荷物になるから置いて行こうと言つた藤川くんに松永くんが反対して、わざわざ持つてきた薪が役にたつ

ている。本当なら、城についているから必要である筈はなかつたのだ。城に着いていなくても、街に入つてしまえば、自分たちで料理をすることもなくなる。

こんなふうに、松永くんは先を見る目を持っている。役たたずのあたしとは違う。あたしの意見なんて、意見とは言わない。ただの自己主張にすぎない。もしあたしが逆のことを言つていたら。あたし一人忘れてもいいから迷路なんて嫌だから帰るなんて言つていたら、彼らは迷わずあたし一人が元の世界に帰ることを許しただろう。そして彼らは三人で迷路に挑戦するだろう。つまりそういうことなのだ。

3

夜が明けた。

なんだかがやがやと騒がしい声がして目が覚めると既に他の三人は起きているらしく姿がなかつた。『こそ』そとテントから這い出でみると人だかりができていた。街の人達が集まつているらしい。

「どーしたの」

やよいさんは当然といつよに朝ごはんの支度をしていて、藤川くんと松永くんが街の人と話をしている。あたしはやよいさんにそつと訊いてみた。

「なんか珍しいみたいよ。わたしたち」

手を止める事もなく、やよいさんはそう答えてくれる。

「門の中に入つて、ここで野宿した人達つて少ないみたい。で、珍しがられてるつてとこね。丁度いいからつて松永がいろいろと情報を仕入れているところ」

「ふうん」

「どうやら明日からは野宿しなくてすみそうだわ」

「お風呂入りたいね」

旅の間中、あたしたちは何度この会話をしただろう。一人で笑いあつていたら藤川くんたちが帰ってきた。街の人達も帰つてゆく。なんとなく見ていたらその後ろ姿がふつと消えた。

「え？」

「思った通りみたいだ」

松永くんが言った。

「昨日の夜に言つた通りらしい。もう少し整然としてるけどね」

「整然と？」

やよいさんが聞き返す。

「交差点で空間が切り替わるらしい。だから、ここからでそこの道だとすると、そのさきに次の道が見えるだろう？ あれを渡ろうとしたり曲がろうとしたりするとどこか別の道に出るらしい。その間なら行き来が可能。ただ、法則があるらしい。通るたびに違うところに出るわけじゃないらしいんだ」

「そう」

「他には？」

腕組をしてじっと聞いていたやよいさんが冷静に訊ねた。

「姫君の言つたことに盲点は本当になかつたか。松永には判つていたよね」

「勿論」

人さし指で眼鏡を押し上げて松永くんは言う。

「と言いたいが、実は街の人達が教えてくれたんだ。道を教えてもらつたら駄目だというが、正確には城への道を教えてもらつたら駄目なんだそうだ。だから、例えば宿に泊まりたいと思つたらそこらへんを歩いている人に言つて宿はどこかと訊ねねばいい。そうしたら、そこまでの道を教えてもらえる。あとは……」

松永くんはそこで言葉を切つて藤川くんを見た。藤川くんは肩をすくめる。

「一週間で道は変わるそうだ」

溜息とともに松永くんがそう言つ。

「えつ？ ジヤあ、しらみつぶしに探すつてこつのは無理つて」と

？」

「まあねえ……」

藤川くんが空を仰ぐ。

「やつぱり……」

やよいさんが咳く。

「整然としてるつてあたりから怪しきもんだとは思つたけどね。確かに」

それから松永くんはやよいさんを見る。

「作戦、立てようか」

「あら、わたしが必要なの？」

やよいさんはぴつと自分の頭を人さし指で示してみせ笑つた。
「非常に残念なことにね」

「待ち合わせ場所、決めておこつか」

唐突に藤川くんが言いだした。

「例の宿屋。太陽が真上に登つたら」

松永くんが言い切る。

「じゃあ、ひとつと食べて後かたづけしようつ」

ぱんつとやよいさんが手をたたいた。

出掛ける前に簡単な打合せをした。松永くんとやよいさんはこの街を上空から見た図を手に入れられないか調べてみるという。地図とこつものがあるとすると、おそらくそれには道順も書いてあるのだろうと思われたのでそういう回りくどい言い方になつたんだけど、セットで法則も探せたらと思つてこるらしい。藤川くんとあたしはとこつと同じようなことなんだけど、この街にはどんな店があつてなにが手に入るかを調べるらしい。頭脳一つが固まつてしまつていのかなあと思わないでもないけど、頭脳の片割れの松永君が提案し、もう片方であるやよいさんが何もいわなかつたので文句の言い

ようがない。いつも松永くんと一緒に活躍している藤川くんも賛成したようなので、多分これで間違いない方法なんだろうと思つ。けれど。

「なに?」

藤川くんが訊いてきた。

「なんで今回はこんな分け方なかなあつて思つて」

「手に別れて行き当たりばつたりに交差点を渡りながら、店の種類や、売られている品を確認してはメモしていく。そんな作業繰り返して、數十分。交差点を渡る時がなかなかスリーリングなんだけど、道の角にある家は道を挟んで両側ともメモして、どんな通りにあるかもチェックする。松永くんたちが見取り図を手に入れられなかつた時に無駄にならないようにするためだ。

「まあ、松永と小松が気を回してくれたんじやないかと」

藤川くんは顎のあたりを人さし指でポリポリと搔きながらぼそぼそと言つた。

「え?」

「あと、俺たちは偶然城にたどり着くことができるともしれないけど、ちやんと考へて辿り着くことは出来ないから確実性がないってことじやないか?」

「つてことは」

「間違つて城にたどりついたとしても気にせざ帰つていこう」と
だと思つよ」

「うーん」

本当は、そういうのは好きじやないんだけど、最善の策とこいつことなんだろうか。

「だったら、頭脳が別々になつたら、そのぶん確実になるつてことでしょ?」

「だからそれは、それくらい難しいパズルなんじやないか?」

「パズル、ねえ」

「一瞬のひらめきのある奴は一種の天才なんだよ。あいつらがそう

だろ？ 一人いて、俺たちの水準に合わせることなく話をすればその分早いことだろ、きっと」

「藤川くんは納得してるんだ」

「信用してるからね。あいつらがもし帰る方法を見つけたら、絶対俺たちに教えてくれるだろ？ 俺たちがその方法を見つけてもそうだ。でも俺たちの場合、方法を見つけられるかどうかってーと、無理だと言つてもいい。どっちかっていうと偶然たどりついちゃつたつてパターンだろ？ そこまで考えてのこの分け方だってのは判つたからね。未緒は信用していないの？」

首を振る。

「どうせなら、一緒にいたいなって思つて」

そういう可能性があるのなら、なおさら。

「ま、午後からはそうなるだろ。午前中を無駄にしたくないってだけだと思つけどな」

ポケットに両手をつつこんで顎で行く先を示す。

「偶然城にたどりつける確率は、無茶苦茶低いんじゃないかな？」

言つて歩きだす。

「ま、俺たちや、『えられた仕事をかへへになしていい』一ぜ」

その後ろ姿をあたしは見る。

「藤川くんつて頭いいよね」

泣き言だということは判つていて。あたしには割り切れないいろんなことが割り切れる藤川くんややよいさんや松永くんがうらやましいだけだと、このことも、勿論、判つていても、納得できなければなんにもできない。自分がくやしい。

藤川くんがぴたりと止まつた。ふうっと息を吐く。それからゆっくりと振り返つて、立ち止まつたままのあたしの目の前まで引き返していく。

「俺は……きっと松永だつて小松だつて同じだと思つたけど、未緒がいたからこの旅を続けてこれたんだと思ってるよ」

ぽんと頭を手ではたいて、そのままあたしの肩に腕を回して背を

押すようにする。あたしは流されるように歩きだした。

「だからさ、自分一人役立たずだなんて思うなよ」

藤川くんの声はなんだか困っているふうだったんだけど、あたしは返事できなかつた。

昼、まちあわせの宿屋でやよいさんと松永くんに会つた。地図というか見取り図は手に入つたらしい。そのこと自体はめでたかつたんだけど、問題は通りの数らしかつた。

正方形の上の辺のあたりが横長に城になつていて、堀と高い壁でくぎられている。真ん中に門があつて、吊り橋で渡るようになつているけれども普段は上げられていて渡れないようになつていい。吊り橋のあたりからまつすぐ下に道が延びていて下の辺のところに門がある。城からの通りを中心に左右にそれぞれ四本ずつで縦の通りは計九本。それから横の通りが十本あつて、底辺に一番近い横の通りだけが途中で切れている。交差点は全部で八十九個。その八十九個の交差点に対しても必ず四個の入口があるわけだから、最低でも八十九個の四倍分の空間の切替え場所があるらしい。それを全部調べるのに頑張れば三日頑張らなくても四日あれば十分らしい。松永くんとやよいさんが言うには。

四日あれば全部調べられるのなら、楽勝じゃない。なんてあたしは思ったのに、二人は浮かない顔をしている。

「えーと？」

宿屋にくつついている食べ物屋で食事をしながらそんな報告を聞いていたあたしは、うなつていて一人に先を促すように首を傾けて言つてみた。

「うん、つまりね。四日あつたら全部調べられるのなら、何故今までここを抜け出せた人が少ないのかつてことなんだけね」あたしはさらに首を傾げる。

「少ないのかな」

確かに姫君はそういう風には言わなかつた。

「ああ、確かに姫君はそういう風には言わなかつたけど。簡単ではないとは言つてたよね」

「タイムリミットは一週間。三日も余つてしまつ。これが一日とか二日ならまだいいんだけど、三日あれば頑張つたら、ギリギリで全通り確認できてしまつわけだから」

やよいさんが補足するよつて言つた。

「えーと、じゃあ、もしかして。簡単じゃないつてこと?」

「ウラがあるつてことか……」

藤川くんが呟く。二人がうなずいた。

「あくまで『かも』なんだが……」

「で、次変わるのはいつなんだつて?」

「明日。だから今日は動かない。でも、午後からはヒマだから城の近くまでは行つてみようと思つて、この堀と吊り橋の当たりに出るための道筋は聞いといたんだ。食事が終わつたら行つてみよつ」

松永くんの提案にあたしたちは頷く。そして、藤川くんが顔をしかめた。

「訊けば答えてくれるんだつけ、そう言えば」

あたしと藤川くんはそつやつてこの宿屋にたどりついた。

「つてことはさ、自分たちで調べなくてもある程度の道筋は判るつてことか?」

「まあ、そういうことだね」

松永くんは肩をすくめた。

食事が終わつてあたしたちは四人揃つて行動していた。松永くんの提案どおり道のどんづまりの堀を見に行くことになつたのだ。前に藤川くんと松永くんが一人でメモを見ながら歩く。交差点では必ず振り返つてから渡り、後ろを歩くあたしとやよいさんが渡るまで待つついてくれた。

やがてついたのは地図でこいつとじゆの左上の堀のところだつた。

「あの壁の向こいつなんだね」

堀は飛び越えられないらしい。

「ここの覗けるの？」

「やつてみようか」

藤川くんはそう言つた時にはもう体を乗り出していた。左右をゆっくり見てから。

「あ、川が流れてる」

「それは堀と言つんじゃないの？」

あたしも身を乗り出す。

石を組んで造られた幅一メートルぐらいの堀がずっと続いている。左側を見るに壁の下を潜つているから外につながつているんだろう。「当然、ここの渡つてもたどりつけるわけじゃないんだよね……」あたしはやよこさんを振り返つた。

「きっとね」

やよこさんは肩をすくめる。

「こんなに近いのにね」

体を起こしてあたしは城の内壁を見上げた。高い石造りの壁だ。跳べない距離じゃない。けれど、きっと違う所にたどりつくのだろう。

「この街でのご法度はね」

ずっと黙つていた松永くんが口を開いた。

「通りで物を投げることなんだ」

「あ……どこから飛んでくるか判らないから」

松永くんはうなずいて続ける。

「道を隔てて隣の家に行くにも、遠回りしないと辿り着かないよつなどこにもある」

「うん」

「これが、魔法の一環なんだとしたら、この街に住んでいる人たちは、なんなんだろう」

やけに難しい表情をして松永くんは呟いた。こういう話し方をするのは、松永くんにしてはとても珍しいことだったの、あたしと藤川くんは思わず顔を見合せた。

「それを言つなら、魔王にしろ、ijiの姫君にしろ、不思議は山積みだよね」

「そうなんだ……」

やよいさんの言葉に松永くんは苦笑してみせた。

旅の途中、あたしたちは何組かの同じようなグループに出会った。みんな、姫君や幼い王子様を魔王から助け出すために招ばれたのだと言つていた。けれども、行く方向はバラバラで、もちろん招んだ人たちもさまざまで、なんだか魔王は世界中でいるような気がしたものだ。

4

そして、あたしたちは一本一本道を調べ、判りきつていたことだつたけれど、その三日後には行くところがなくなつていた。五日後には、街の人たちに道を聞くまでもなく、覚えてしまつていた。見落としがないかどうかもう一度一本一本調べていつたからだ。

あたしがゴネたのを藤川くんから聞いたからか、調べる作業はずっと四人一緒だつた。といつても、あたしと藤川くん、やよいさんと松永くんという分け方で、実際はなんだか一人ずつで行動しているみたいな感じだつた。松永くんがなにかあるとやよいさんに相談するからだ。これも、とても珍しいことだつた。旅の間中、松永くんは基本的に一人でいろんなことを決めていたし、やよいさんも、よほどのことがない限り、松永くんの決定に抗議することはなかつたのだ。あたしがそういう疑問を口にすると、藤川くんは「よほど

慎重にしたいんだろ?」と言つたのだけれど、やつして慎重にしたいのかという疑問の答えはなかつた。

五日田の夜、宿屋であたしたちは図面を見ていた。当初考へたことはとりあえずすべて試したので、今後の検討会といったところだ。

「何かしたいとこはある?」

八方手詰まりなのだと松永くんは言つたのだ。松永くんとやよこさんが考へたことは全て試したところじだ。そしてあと一日で、道は変わる。その一日間で無駄だと想つこともやつてみよつところだ。

「つてもなあ……」

藤川くんが天井を仰いだ。その気持ちはよく判る。私にしろ、藤川くんにしろ、角を曲がる以外には思いつかない。

「思いつくところはすべて通つたし、堀にも落ちたし。……なあ」同意を求められてあたしは頷いた。図面を見ると、そこにはどこに辿り着くかとこまかに書き込まれてこる。通つていらない交差点は一つもない。

「じゃ、なくてさ。もつとこりへ……、脛根から下りてみるとか、そういう突飛なことがいいんだけど

「突飛ねえ」

藤川くんが腕を組む。

「ねえ、あのね。他に可能性はないの?」

あたしは訊いてみた。考へられることと言つても、あと一日しかないから、今回は諦めたところとも考へられるしと思つたからだ。「ないことはないんだけどね」

松永くんが苦笑する。

「道を一本一本調べてこくよつもつとやつかになんだ。もつほとんど、確率の問題」

あたしは首を傾げる。

「それこそ魔法の世界。酒屋に行つて八百屋に行つて薬屋に行つて

道具屋に行つてもう一度八百屋に行くとお城に辿りつけるみたいなか、道順が正しければ辿り着くつていう

言つている意味は判るんだけど、なにが難しいかが判らない。あ

たしは首を傾げたままだ。

「どこに行つていいのか、何か所に行つたらいいのかまつたく見当がつかないからね。五か所なら五か所だつて判つてるならいいんだけどね」

少し納得がいった。

「たつた一週間でどうにかなるとは思えないんだよ。偶然見つかる以外にはね」

「確かに……」

「だから、もつと短絡的で、突飛な方法がないかと思つてさ」

「まあ、つまり。煮詰まつてしまつたわけよ」

ずっと黙つて聞いていたやよいさんがトドメを刺すように言い、

松永君は肩をすくめてそれを肯定した。

あたしは考えてみる。

突飛な、思いもつかないようなことがあるかどうか。何か、他に。街はぐるつと高い壁に囲まれてゐる。入口は一つ。あたしたちが入つてきた門のみ。そこからまつすぐに道がのびていて、突き当たりが城の門。街は碁盤の目のようで、とても整然としているけれど、交差点で空間が曲がつてゐるため、真つ直ぐ歩いているだけでは目的地には辿り着けない。

判つてることを頭の中で整理する。

「行けない所つてあるんだつけ」

ふと思いついて言つてみる。空間がねじまがつてまるでパズルのような街は七日間たつと空間の曲がり方が変わる。何通りあるかは判らないけれど、毎回毎回その曲がり方をどうやって決めるのだろうか。それが疑問だ。

「ああ、末緒の言いたいことは判る」

やよいさんがうなずいてくれた。

「でも、この街は整然としてるでしょ。この大通りを中心に左右対象だしね。それだけでも一つのパターンが一つになつたって考えられるでしょ」

「あ、鏡に写したみたいな」

「うん、あとは上下も逆さまにできるし。何通りか作つておいて、組み合わせてローテーションさせればね」

「でも、基本が同じなら簡単じゃないの？」

「ああ、あのね。ジグソーパズルつてさ、同じピース数のパズルの場合、型は一つしかないって知ってる？」

「？」

「例えば千ピースのジグソーパズルが一種類、子犬の絵と山かなんかの風景のがあつたとする。これはね、絵が違うだけで、パズルのピースの形は同じなんだよね。でも、絵が違うから人は惑わされる。上から全体を見てても惑わされるくらいなんだから、その中にいたら絶対わけわからなくなると思うよ」

「そりかあ……」

「そりは言つたけど、実は判つたような判らなにような感じだった。あたしは地図を見つめる。」

「でも、その発想は面白いな」

松永くんがぽつりと言つた。

「その発想？」

「どの発想だ。」

「行けないとこ。あつたら困るだろ？　だからそんなものはないと思ってたんだ。でも、あるかもしれないよな。城以外にもさ」

「あ、そうか。行けないとこはあるんだ、実際」

藤川くんがうなずく。

「そう、お城。ここには行けないんだ」

松永くんはわざとお城の門の前の橋を指先で示した。

「城から出てきてこの橋を渡つて、この道を横切らうとするとき、どこに飛ぶんだろう」「

次の日の朝、もつすつかり馴染みになつた宿屋のおじさんと、あたしたちは地図を持つて話をいつた。

「言つてもいいのかい？」

質問を聞いて、おじさんは感心したようにあたしたちを順番に見てからそう言つた。

「つてことは……」

疲れたように藤川くんが言つた。つまり、聞いたら最後、記憶を失つてしまつような質問なのだつた。

「そうだな。まあ、いいところに田をつけたと言えば、言えないことはないな」

おじさんは豪快に笑う。

「なかなか頑張るじゃないか」

「まあねえ。帰れなきや、意味はないんだけどね」

「たつた一週間で帰れりや、苦労はないや」

「そういうもんなわけ？」

藤川くんは、既におじさんとタメ口をきいている。

「ほとんど偶然で帰つたやつらもいるがね、あんたらみたいに、慎重に行動してゐやつらで一週間で帰つたモンはいないね」

「へえ……」

藤川くんは少し顔をしかめる。その気持ちはあたしにはよく判る気がした。

食事を終え、あたしたち四人は街に出た。やよいさんと松永くんは先程のおじさんの言つていていたことについて話し合つていて、あたしは藤川くんとそれを眺めていた。

「なんか、ヒントがあつたのかな」

「さあねえ……」

藤川くんは首をすくめる。

「どつちかつてゆーとさ、偶然でも帰れた奴がいたってことの方が、俺には重大なんだが」

「……うん」

「昨日の夜、何か突飛な案がないか訊いてただろ？　流石頭のいい奴は、そこまで判つてることだよな」

「……うん」

「……」

藤川くんがあたしを見ていた。

「なに？」

「おまえ、元気ないな」

「断定したな？　根拠を聞きたいぞ、あたしは」

「いつもの、問答無用の強引な明るさは一体どこのこいつたのかな？」

「なんか、無茶苦茶な日本語」

笑つてみせて、それからあたしは溜息をついた。

「旅をしている間はさ、暗くなつてもしようがないんで楽しむことにしたんだよね、実は。やつぱり、どこかで判つてたんだよね、お気楽な旅だつて。それがさ、ここにきて、急に気楽に構えてはいられなくなつたじやない。あの能天氣さはハタ迷惑なんじやないかつて思うわけよ、やつぱり」

「役立たずだから、か。……まだ、こだわつてるわけ」

藤川くんがむつとした顔をする。

あたしは頬を膨らました。

「しようがないじゃない。事実なんだから」

「事実つて、おまえ、俺たちの話を聞いてないだろ。未緒がいなかつたらこの旅は続けてられなかつたつて、言つたろ？」

「信じられない」

「んじや、信じじ。今からでも遅くはない。……あのは、俺と松永と小松が三人いたとして、会話があると思つか？」

「してないじやない」

意味が判らない。

「必要最低限のな。基本的に俺たち三人は個人主義なんだよ。集団生活に向いてないの。俺はまだいいよ。例えば松永と組んでいくことはできる。小松と一人でもいいな。できることが違うからさ。でも、松永と小松は一緒にいられないだろ?」

「いるじゃない」

あたしは一人を見た。

「あれは、必要最低限の意見交換だつて。あの一人が世間話をするところを見たことがあるか?」

「ないような、気がする……かな」

「ないと思う。ちなみに、俺と松永も、俺と小松もいい、世間話もできない」

世間話も、と藤川くんは言った。

「反りが合わない、としか言いようがない。会話がなりたたないんだよ。旅に出てしばらくして気がついた。松永と小松はすぐに気付いてたんじやないか? あいつらはとりあえず表面上は、人に合わせることができるから判りにくいけど、そういう人間ばかりが周りにいる生活っていうのは耐えられない筈なんだ。しかもこいつらの環境だし」

「だつて、それでもちゃんと仲良く旅してたじやない」

「未緒がいたからな」

あたしは、意味が判らなくて藤川くんを非難するようにみつめた。「嘘じやない。未緒がいたから、旅ができたんだ。お前がいたから、俺たちは好き勝手せずに、四人でずっと旅ができたんだよ」

「あたしは、ただのお氣楽なバカだよ」

「そうだよ」

「お荷物だつたんだよ」

「だから」

藤川くんはうなずいた。

「だから、みんなで守ることにした」

「そんなのっ！」

あたしは叫ぶ。そんなの肯定してほしくない。

「いいか？ 一人の人間を守りきれる程、俺たちは強くない。そんな力はない。未緒がのんきに笑つてたから、未緒がなんのためらいもなく俺たちと会話をしてくれたから、だから俺たちは力をあわせて守ろうと思った。危険なことはなにもないのんきな旅だと判つてたけど、守つてやろうと思った。そう思わせるほど、おまえの存在は重要だつたんだよ。でなきや、お気楽バカのお荷物なんかほうつておいて、とつとと帰るよ」

「あたしは」

藤川くんの気持ちは判る。でも、それじゃあ意味がない。そんな意味はいらない。あたしは、欲しくない。

「あたしはペツトじゃない」

立ち上がる。田の端にやよいさんと松永くんが見える。でもあたしは彼らに背を向ける。

「未緒」

藤川くんの声を振り切つて、あたしは歩きだした。

景色が変わる。あたしは交差点を通つたのだ。心配することはない。道ならもうとつこの昔に頭の中に入つていい。帰る所は宿しかないし、少し頭を冷やしたいだけだ。

見慣れた風景。町並み。人々。もう顔見知りも何人かできた。目で挨拶して、あたしは歩く。角を曲がる。そして、見慣れない人を見た。若い女の人だ。

「あつらー」

長い、ウエーブのかかつた髪の毛を結びもせず背中にたらしいる、派手な顔だちの女の人だった。目をみひらいて大げさに驚いた表情をしている。

「あなた、初めて見たわ」

「あたしもです」

「いつ来たの？ あたし結構長いんだけど。つい最近？」

そのセリフにあたしは驚いた。

「長いんですか？」

「そう。長いんです。長々と、何週間かしらね」

何週間。週が単位だということに少し驚く。そして、納得もした。
「うん。そう。ここでは月とか年なんて単位は役にたたない。あるのは、何パターン経験したか。つてことは、まだ来てから日が浅いのね」

「はい」

「そんなに緊張しないでよ。あ、ちょっとお茶でもしない？ センのお店、結構美味しいのよ」

彼女は、ダテに長い間ここにいるわけじゃないのよと血濡してみせる。あたしは笑つてその後をついていった。

5

「長いって、どうにかなんですか？」

あたしは单刀直入に訊ねた。

「帰りたくないから、ずっとここに居るつづいて」

彼女はあっけらかんと言つた。

「仲間と離れたくないのよ。ここから、記憶を持つたまま帰れる確率なんて低くて、そんなものに賭けるなんてイヤなの。ただそれだけよ」

彼女はあたしの顔色を読むようにぱらりと視線をここからに向ける。

「ねえ、あなた、ここに来る前のこと覚えてる？」

いきなり話が飛んだけど、あたしはゆっくりと首を振つた。

「そうでしょう？ あたしもそう。全然覚えてないの。だから色々考えてみた。仲間とね。どうしてここに来ることになったのか。どう

してこんな迷路に放り込まれなければならなかつたのか。どうして、

「一夜の夢なのか」

「答へが、出たんですか？」

「まさか。そんな簡単に出るもんじゃないわ。そんなのきっと、記憶を持つたまま帰れた時に判るにきまつてゐるのよ。でもねえ、あたしは不思議だつた。なんで、こんなところで冒険なんかしなくちゃならないんだろうつて、ずっと思つてた。だつてね、年とらないでしょ？ 大した怪我もしないでしょ？ しかも、現実の世界にも迷惑はかけないでしょ？ 出来過ぎじやない。なんでだろうつて、夢じやないのかなつて思つた。こんな都合のいい世界があつていいんだろうかつて思つてた。そうしたら、最後の最後でこんな迷路が待つていた。それで納得したの。ああ、これが本当の冒険なんだつて。これがあたしを試すための冒険なんだつて、納得できたのよ」「納得、できたんですか？」

「できたんだな、これが。といつか、納得させられたんだな」

彼女は淋しそうに笑つた。

「どうしたこと、ですか？」

「ここに着くまでの冒険は、前置きと考える。まだ、正体を現してなかつたとも言える。でも、この迷路は、自分たちで選だ道しか進めないようになつてゐる」

彼女は何かを読むようににそつと微笑つた。あたしには意味が判らない。

「判らない？ ここにまで来たらずつと樂しみにしていた現実世界はすぐそこにあるのよ。ここで体験したことを忘れれば、すぐ帰ることができる。忘れるのが嫌ならば道を探せばいい。残りたければ、探さなければいい。だからあたしはここに残ることにしたの。仲間と、ずっとここに残ることにしたの」

彼女はにこりと笑つた。

その顔が少し哀しそうに見えたのは氣のせいだつたのだろうか。

見ていたくないと思つたのは、勘違いだろうか。

「悪いね、おねえさん。ここいつ、俺の連れなんだ。妙なことを吹き

込むのはやめといてくれないかな」

左肩に手を置かれ、ぐいっと後ろに引かれた。藤川くんの声だつた。

「妙なこと? 一体、なんのかしら」

彼女は楽しそうに笑つた。

「別にとぼけなくてもいいんだけどさ。つてことで、こいつはつれていいくよ」

「残念ねえ」

「またの機会に」

肩を抱かれて無理やりに立たされるのにあたしは従う。

「ねえ、帰れる日処はついたの?」

女の顔がわずかに真剣味を帯びた。

「さあねえ。うちの知恵袋たちはなにかが引っ掛かるつて言つてはいたけどね。関係ないでしょ?」

「……そうね」

あたしたちは店を後にした。藤川くんに背中を押されて、背中にその体温を感じてあたしは歩いた。

「大バカ者」

声が怒つている。

「一人で歩くんならまだしも、知らない人間についていくんじゃない」

「人に、影響されるから?」

動きが止まつた。

「いい影響ならどんどん受けろ。今は、たつた一人の行動が士気に影響する時だ」

「あたしたちは、仲間だから……」

「そう」

手が、離れた。

「気をつける、と」

あたしたちは向き合つた。

「未緒

「ごめん。少し考えさせて」

「何を?」

「いろんなこと。やつきの人の言葉も、藤川くんの言葉も、あたしには理解できない。このままじゃ、あたしはダメだから。少し考えさせて。どこにも行かないから」

藤川くんがあたしを見る。真剣な表情なんだけど、少し困ったなつて感じで笑っている。あたしが一番好きな表情かもしれない。

「どこにも行かないのなら、一緒にいるってことだよな?」

あたしはうなずく。一緒にいるけど、それは考えているだけで、いつしょにいることが答えじゃない。

「じゃあ、いい所みつけたんだ、一緒に行こう」

「え?」

あたしの返事を待たずに藤川くんはあたしの手をひっぱってすたと歩く。

「ね、ねえ。どこに?」

「いい所つて言つたろ?」

それだけ言つて、藤川くんはなんだか楽しそうにあたしに背を向けたまま歩いた。

つれてこられた場所は街の中央の建物の屋上で。

「すつ」「ー」「いつ」

なんだかとても久しぶりな景色だった。

青い、空。丸く切り取られた深い青の空があった。雲一つない晴れた空の、その真ん中にあたし一人がいるような、そんな気持ちになる。

吸い込まれそうな青い空を、あたしはバカみたいに見上げていた。ふいに涙がこみ上げてくる。これから、どうしよう。

不安が、あたしの心を襲う。どうしようもなく不安で、いてもたつてもいられない。

「の先、帰れる自信はない。松永くんがいてもやよいさんがいても、藤川くんがいても、帰れる自信がない。だから、不安でしかたがない。

あの女の人は、あたしの願望だ。の人には会わなくとも、いつかあたしは自分の中にあの人をみつけただろう。帰れないだろうという不安に耐えきれずに、あの人と同じことを言つただろう。そして、それを呑み込んだら、もう戻れない。思い出が大切だと言つたあたしは、結局思い出にすがつてゐるだけなんだと氣付いたら、あの人と同じ瞳をするしかなくなる。妥協してしまつたら。

イヤだと思った。あの姿は醜いと思った。未来を拒むことができないと目の前につきつけられて、さらに不安になつて、あたしはこれからどうしたらいいのか、まったく判らない。ここに着いたみたいに、もう、無責任に騒ぐことはできない。

「未緒」

肩に体重を感じた。

気がつくと、藤川くんに背中から抱きしめられていた。

「一人じゃないんだからさ、四人なんだからさ、なんとかなるつて」

藤川くんの声は温かい。

「帰りたいね」

あたしは呟くように言った。本当の、心の中からの気持ちだった。

「うん？」

「帰りたいね」

藤川くんの手に自分の手を添えて。ちょっと力を入れて。

「初めて、心から思った。帰りたいって」

ずっと旅をしている間も、この迷路に入つてからも、こんなに帰りたいて思つたことはなかつた。

「ああ、帰るうな」

少し困ったように藤川くんが応えてくれる。でも、そりじゃないんだよとあたしは言わなかつた。

6

夕方まで屋上にいて、街をとづかこむ壁に夕陽が沈むのを見てからあたしたちは宿に帰つた。宿ではやよいさんと松永くんが待つていて、あたしを見ると少しほつとしたような顔になつた。

「「めんなさい」

あたしは謝つた。

あたしの姿をみとめてから立ち上がりそばにやまつてきたやよいさんに、抱きつかれた。

「やよいさん？」

「心配した……」

「俺がついてるんだから大丈夫だつて

「だから、心配だつたんだが」

「やよいさん……」

「どういう意味だよ……」

「そのまんまの意味だよ。藤川じゃ頼り無いってことだ。……なあ？」

松永くんの言葉に、やよいさんはあたしに抱きついたままつなづいた。

「信用ないねえ」

藤川くんは苦笑する。

「やよいさん？」

あたしは、抱きつかれたまま、やよいさんに声をかける。やよいさんはそつと力をぬいて身体をはなした。正面から顔を見て、驚いた。やよいさんは泣いていた。

「やだな、安心したから」

照れ笑い。あたしは笑顔を返す。

「大丈夫。あたしは、そんなにバカじゃないから」

やよいさんや、みんなが心配していたのは、あたしがここに残るうと言ひ出すことだつたのだろう。頭のいい二人は姫君が言つた時からその意味を理解していに違ひない。そして、一番言いそうなのはあたしだつたのだろう。あたしを一人にしなかつたのはきっとそういう意味で。

「忘れたくなつて思つたら、あたし一人で残るから」

今はそんなこと思つてもいなかつから、あたしははつきりと言える。でも、三人はあたしの言葉をそつはとらなかつたらしい。松永くんでさえ、表情が少し変わつた。

「未緒」

「あくまで、思つたら、だけど。大丈夫。そんなこと、まったく思つてないから」

松永くんの表情は少し固い。やよいさんはあたしを検分するように見つめている。藤川くんは少しだけ肩をすくめて椅子に座り、あたしたちにも、目で座るよう勧めた。

困つたな。あたし、藤川くんのそういう顔大好きなんだけど。そんな顔みると、嬉しくなつて笑つてしまつんだけど。

「なに、にやにやしてんだよ。 小松、お茶いれてくれると嬉しいんだけどな、俺は」

やよいさんは珍しく素直にうなずいて、やかんを手にすると備え付けのストーブにかけた。

あたしは、いつもの席に座る。藤川くんは相変わらず、じょうがないなつて顔をしていて、それが嬉しい。

「何か、決めたんだろう？」 石野さんは
松永くんが静かに口を開く。

あたしはうなずいた。

藤川くんの溜息が聞こえる。

「俺たちは見捨てられるのかな？」

さすが、松永くんは頭がいい。

「そういうわけじゃないけど。あのね、別行動をとりたいの」「空を見ながら、帰りたいって思った。それが大切だと気付いた。

そのためには、一人でいることが一番だつて思った。

「今ね、すつぐ帰りたいの。ここにみんなでいたら、あたしは甘えてしまう。いつまでもここにいたいって思つてしまつ。それは、イヤなの。せつたい、イヤなの」

「うん」

「だからね、別々の行動をとるつ。あたしは、あたしで道を探す。みんなは、みんなで探して帰つて。あたし、絶対みんなのことを覚えてるから。みんなが忘れてても、絶対に覚えてるから。覚えたまま帰るから」

自信があるわけじゃない。忘れないまま、記憶を持ったまま帰れる自信なんてない。でも、帰つたあと、みんなとまた友達になれる自信はある。一からまた始めることができる。あたしたちは、藤川くんが言つたような、ここでしか築けない関係じゃない。少なくともあたしはそう思つてるから、だから。

「絶対、帰るつてこと?」

松永くんが確認するつてこと。ひづけやよこさんがあ茶をいれてきた。

「うん。帰る」

「帰れるの?」

それは、道をみつけたのかといつ質問なのだつ。そう解釈した。あたしは首を横に振る。

「そんな返事にOKは出せないよ」

「同じく」

固い声でやよこさんが言つ。椅子に座つてあたしのことを見る。

「でも、決めたの」

まるで、両親に反対された進路を選ぼうとしている娘みたいだな

と思つて、あたしは心の中で苦笑した。

「それに、俺が加わるつてのは駄目なプランなわけ？」

「藤川くんが軽く手をあげてそんなことを言つた。

「うん。駄目プラン。却下」

「じゃあ、期限をつけよつ

「藤川は賛成なんだ」

やよいさんが責めるよつて言つた。

「まあ、末緒がそれで元氣なら、そういうのもいいかなとは思つよ。藤川くんはあくまでもあたしの大好きな顔でそんなことを言つて。でも、こつまでもつてわけにはいかないでしょ、やっぱり。だから期限つき。次の週で決めてしまおうぜ。俺たちもそれ見つけられなくともといひことだな」

松永くんが確認する。

「そういうこと。そういうのじゃ駄目か？」

あたしは首を横に振つた。ぶんぶんと勢いをつけて。同じことを、あたしも提案しようとしていた。

「すっぱり忘れてもいこつてことか？」

あくまでも松永くんは確認するよつて言つた。

「違う」

あたしは否定する。

「覚えてるつて、あたしは。どんなことをしても。忘れたりしない。上手くは言えないけど、こじであつたことを忘れても、みんなの名前や顔を忘れても、みんなといったことを忘れても、なんだろう、覚えてることつてあると思うの。あたしは。出会つたら、絶対判ると思つの。やよいさんの優しさや、松永くんのあたたかさや、藤川くんのちよつと困つたような笑顔は、覚えてると思うの」

「まあ、賭ではあるけどね」

それは否定できない。それでも、自分が自分でいるために、絶対に譲れないこともある。

「じゃあ、私も絶対に覚えている

やよいさんがあたしのことをまっすぐに見て言った。

「未緒が言うより可能性がありそりでしょ。松永も私に賭けなさい」

「……」

無言でやよいさんの方を見た松永くんが溜息をついた。

「なんで、そりもそろつてみんなして、やつこつ無茶なことを言
いだして、しかも短気なんだ……」

「たかが一週間。それど一週間」

藤川くんが重々しく言つ。

「松永だつて、普通に考え方の範囲でみつけられるとせもつ思つ
てないでしょ」

やよいさんの突き放すような言葉に溜息を返す。それは肯定の意
味だ。

「次の週間を、今週と同じように一本一本の道を調べていく気は
ないでしょ。そんな単純な答えじゃなつてことは予想がつくもの。
なら、あと一週間もあれば充分だつてことじやない。なにが短気な
んだか」

やよいさんの言つ方がなんだかおかしくて、藤川くんとあたしは
顔を見合させて笑つた。つられたようにやよいさんも笑つて、とつ
とつ松永くんも笑いだした。

あたしはほつとしたのを気付かれないよつてまかすよつにひた
すら笑つた。

別行動。

でも、宿は一緒で、あたしはちゃんといろんな情報を貰えるらし
い。とても過保護だと思つ。それでも、それが条件だつた。別行動
をとるための最低限の条件。毎晩、情報交換をすること。松永くん
はそう言つた。圧倒的にあたしの方が有利だ。そう言つたら松永く
んに否定された。行けないところの質問をしたのはあたしの発想が
あつたからだと言われた。でも、あたしが思うに、その発想から正

しい答えを導き出せたのは、松永くんだからこそなんじゃないだろうか。そんなことを思つたと顔に出すと、せっかく許可してもらつたのにいきなり却下つてことになりかねないから、もちろん素直にうなずいたんだけど。

宿を一步出て、新しい道を見渡す。今日ばかりはどこにつくか判らない。真新しい画面に書き込んでいき、とにかく地図を作ろうといつのがたしの計画だ。瓢箪からコマを狙つたわけじゃなくて、単に地図作り。もう一度行きたいところがあった。藤川くんについてもらつた、街の中心の建物に、自分の力で行つてみたかつた。

相変わらずのスリリングな道を、午前中ぐるぐると歩きながら偶然にもあの建物の前に出るのを待つた。街を一望できる建物を見ることは出来てもその前には辿りつけない。焦らなくても三日間でだいたいの道は判るし、人に訊けば応えてくれる。けれども、思うように行かないこの状態をちゃんと噛みしめておきたいと思つていた。藤川くんに連れられて行つたあの場所で帰りたいと思つたことは、忘れてはいけないことだ。ここでずっと暮らすことはみんなと一緒にいるということだけれど、一步も前へ進まないということでもある。それを忘れたら、あの女人になつてしまつ。あたしは、ここで、みんな一緒に居たいんじゃなくつて、自分達の世界で、みんなと一緒にいたい。この先の未来で、大学行つて、就職して、結婚して、子供が生まれて、そしておじいちゃんおばあちゃんになつても友達でいたい。そうでなきや、思い出なんて、ここでの生活の記憶なんて必要ない。

えんぴつを片手にどきどきしながら交差点を渡る。主な店の看板を見て書き込む。そんなことを繰り返しているうちにお腹になつてお腹がすいた。一度、食堂が目に入ったので、次の交差点で違つていたら引き返そうと心に決めてから交差点を渡つた。

「おおっ」

思わず声が出る。あの建物だった。

仕方ない。昼食はしばらくおあずけだ。

あたしは建物の中に入った。

昨日は何も思わなかつたけど、これは結構変な建物だ。中に誰も居ない。おまけに、入ると正面に階段がある。まるで、屋上に上がるのが目的のような建物だ。もしかしたらこには、この迷路の全体を見渡すための場所なのかもしれない。

とんとんと階段を上がつて行くと屋上につく。まず見えるのは、あたしたちが入ってきた大きな門。屋上にちゃんと立つて振り返るとお城。あたしはちょっと動きを止める。彼女がいた。

「あら、こんにちは」

ひらひらと手を振つて彼女は笑つていた。

「いじいいわよねえ」

長い髪を風になびかせ、彼女は陽気に言つ。

「やあね、とつて食いやしないわよ」

あたしは彼女に寄つていつた。なぜだか、怖くはなかつた。そんなことを考えて、あたしは初めから彼女のこと怖いと思つたことはなかつたことを思い出した。

「やつと仲間ができたと思つたんだけどな」

あたしの顔をじつと見ていた彼女は苦笑した。

「一緒にここに残ろうとする仲間だと思つたのよ。あなたたちをね」

「あの……あなたは一人なんですか？」

「違うわよ。ちゃんと仲間がいるわ。そういう意味じゃなくて、あたしたちと同じようにここに残ろうと思つグループを待つてたのよ

「待つて、いたんですねか？」

「そうよ。一緒にここで頑張つていく人たちを探してゐるの。でも、

あなたたちは帰るんでしょうか？」

あたしはうなづく。

「あなたたちから見たら、あたしたちの方法は逃げなのかもしだれな
いけど。あたしたちには最善の方法なの。それでも、残らうつて人
たちは少なくて、あたしたちは不安になる。そろそろ仲間が欲しい。
じやないと、あたしたちも、きっと諦めてしまう」

諦める。

あたしはその言葉を噛みしめる。違うと思つ。あたしは、諦めた
からこんなことしてるんじゃない。諦めないために、別行動をとつ
たんだし、諦めないために、この一週間でやめることに決めたのだ。
「不満そう」

彼女はくすくすと笑う。

「いつか、あたしたちもあなたたちと同じように思つかもしれない。
いつかあなたもあたしの気持ちが判る時がくるかもしれない。まつ
たく違う状況の時に。そんなことは、その時になつてみないと判ら
ないわよね」

あたしは静かにうなづいてみた。

「健闘を祈るわ。どこかで出会つたら、声をかけて。あたしはしば
らくはここにいるから。無視なんてしないで」

明るくそう言って彼女は去つて行つた。

残されたあたしはゆっくりと街を見渡した。地図と見比べて、同
じであることに安心して、同時にがっかりした。わずかな違いがあ
つたら、それがヒントだと思うのは虫がよすぎるかもしれない。

彼女には、あたしたちが諦めているように見えているのだろう。
あたしには、まったく逆に見えて、彼女達にとつては、今の状態
を維持することの方が大切なことだということだらう。彼女は判ら
ないだらうと言つたけど、あたしにはよく判る。彼女達の気持ちは、
とてもよく判る。判るから、そこへ向かわないようにした。藤川く
んも、やよいさんも松永くんも、もちろん判つてゐると思う。あれは、
悪魔の囁きなのだ。あたしたちにとつては、甘い誘惑の言葉なのだ。
忘れない。思い出は大切だ。そんな言葉に、そんな思いにつけ

いる甘い罠だつただけだ。多分、そう思つていたから、嫌悪した。ただそれだけだ。

昼食をとつて、それからすぐに入門へと向かつた。今度は諦めて店の人に道筋を聞いた。なんだか、懐かしくなつたのだ。あの建物の屋上に出る時、まず目に入つたのが門だつたからだつた。そういうば、あれ以来ここに来ることがなかつた。ここで野宿して街の人達に感心されたことや、最初の交差点で飛んだ瞬間は思い出していたけれど、ここに来ようつて気持ちにはならなかつた。姫君に一度入つたら出られないつて言われたからだ。出られないことをわざわざ再認識しに来るのもイヤだつたからだと思つ。

大きな、大きな門を、あたしは見上げる。よくこんな大きな扉が開いたなと思う。あたしでも、押せば開くのかなとちょっとと思つたけれど試すのはやめた。開かないことを実感するのはちょっとイヤだつた。そんなことはこの週の最後の日でいい。そう思つた。

「未緒」

やよいさんの声がした。あたしは振り返る。

「あ。偶然」

「違つ違つ」

やよいさんが首を振る。

「昼食をとつていいたら、未緒がここへの道筋を訊いていたつて聞いて、面白そうだと思つたから」

ね、とやよいさんは藤川くんと松永くんを振り返つた。一人はなにやら深刻な顔をしている。理由は判らないけどちょっと胸がドキドキした。

「どうしたの？」

声をかけると、二人は「ぐく普通の表情に戻つた。松永くんはかすかに口許に笑みを浮かべてあたしを見る。あたしは藤川くんに不審そうな眼差しを向けてみた。

「怒らないなって思つてさ」

少しだけからかうような口調で言つた。

「別行動つて言つてたもんね」

やよいさんが補足説明。

「あ、そうか。怒つた方がいいんだ」

あたしが言つと、藤川くんは苦笑した。

「いや、別にいいけど」

藤川くんは首を振つてから松永くんを見る。

「な？」

「お流石で」

訳の判らない会話なんてしている。

なんかとつても珍しい光景だったのであたしが見つめていると、やよいさんが背後から抱きついてきた。

「ねえ、末緒。あたしを末緒側に入れてくれない？」

「え？ やよいさん、どうして？」

「あの一人、急に仲良くなっちゃって、淋しいのよつ」

「へ？」

「なーんか、朝からずっと一人でコソコソ話をしてるの。やな感じなのよ」

「いいじやないか、遅ればせながら友情が芽生えたんだから。これで、本気度が上がるだろう？」

藤川くんは妙なところで胸をはつた。

「じゃあ、今まで本気じやなかつたんだ」

あたしが言つと、本気度だと言つただろつと反論してきた。あたしはなんだか気持ちが良くてくすくす笑つた。

「何してるの？」

やよいさんは、扉を見ている松永くんの側に寄つていった。

「こつして見てみると、城の門の扉と似てるなつて思つてさ」

勿論、城の門を間近で見たことがあるわけじやないので、遠田で見た感じが似ているということだろうけど。

「丁度、対になつてゐるのかしらね」「みたいだな」

振り返つて突き当たりの扉をみつめる。

「調子はどう?」「

ぽんとあたしの肩を叩いて藤川くんが言つた。
あたしは笑つてみせた。

「まあまあ、よ

「なら、大丈夫だな」

笑えたから。あたしもそう思つてうなずいた。

「そつちは? やよいさんはなんだか悲しんでるみたいだよ?」「

扉の前で一人はなんだか話をしていた。その声はこちらには届かない。

「うーん」

藤川くんは少しだけ考える素振りを見せた。

「このままいくと、俺たちは帰れるわけだ」

「……うん」

「いやに素直だねえ……。で、まあ末緒は帰れないわけだ」「意見として聞いとくね」

「はいはい。と、すると。帰つた後で末緒を探さなければならぬわけだ。あ、もちろん俺たちは記憶もつて帰るわけだから、探すのは簡単なんだが、なにせ末緒とは初対面だ。イキナリ会いに行つて不審がられるのも問題だ」

うんうんと藤川くんはうなずく。

「で、だ。頭のいいヤツを味方につけておけば、そういう時に役立つだろ?」「

「愛と情熱」

あたしはきつぱりと言つてみせた。

「はい?」「

藤川くんは情けない顔をする。

「愛と情熱があれば、初対面の女の子一人口説き落とす」とぐらり

簡単だよ」

「ただのアブナイ人だと思われたらどうするんですかい」

「大丈夫だつて。忘れないもの。あたしは。ここでの記憶が全部なくなつてたつて、絶対どこかでみんなのことは覚えてるもの」顔を忘れていたつて、名前を忘れていたつて、絶対にどこかが覚えてる。

「だから、藤川くんの愛と情熱があれば、下手な作戦なんかよりも確実にあたしとお知り合いになれるよ」

「……」

藤川くんは空を仰ぐ。

「まあ、そういうことにしておこーか……」

じゃあ、と手を振つてあたしは三人をあいて次の目的地へと向かつた。次は、お城の真正面の道。これは簡単だつた。午前中あの建物を探している時に一度行つたからだ。

地図を見ながら道を選んでいくあたしの頭の中では、藤川くんとの会話がリピートされていた。自分から言いだしたことでも、やっぱり、すつきりさわやかというわけにはいかないとひしひしと感じていた。遭遇する確率はかなり低いと思つていたんだけど、そうでもなかつたらしい。

そんなことを思つて偶然じやないつてことを思い出した。あたしが食事をした店は、いつもみんなで昼食を食べていた店だし、三人はあたしが行つたことを聞いたから門へと向かつたのだつた。

だとすると、藤川くんの「な？」は、そういう意味だつたのだろう。つまり、あたしは怒つたりしないという意味だ。当たつたと言つべきか、はずれたと言つべきか少し悩んでしまう。実際は、怒ることを考えてみもしなかったのだ。

ここに来てからこの迷路の街にたどりつくまで、単なるお気楽な女の子でいたのは、あたしが前向きな女の子だつたからじやなくて、

本当に単なるお気楽な女の子だったからだ。後先考えなくて、その時が楽しかつたらしい。辛いと言つて泣くよりもその辛さを楽しんだ方がいいと思っていた。ただそれだけだ。そんなことができたのは、旅自体になんの危険もなかつたからだ。コンピュータゲームだつて、何回か失敗したらゲームオーバーになるのに、この世界ではよほどのことがない限り失敗すらありえない。だからあたしはお気楽お元気娘でいられたんだし、他の三人はそんなバカと一緒に旅ができたんだと思う。

その考えは今でも変わらない。あたしがもし本当に四人の中でもちゃんと役割を果たすようなキャラクターなら、門の前でみんな無責任な発言はしなかつただろう。藤川くんはあたしがいたから旅を続けられたと言つたけど、それが正しいのなら、ここにいるあたしは間違つている。あたしはここにいてもお気楽なバカでなくてはならない。あるいはそれを演じていなくてはならない。そうでなかつたから、今あたしはこうして一人で行動しているのだ。

振り返るとあの門が見えた。

まっすぐに見えるこの道は実は曲がりくねつているのと同じなのだ。なんて、文章にしたら詩みたいなことを考えて苦笑した。めつたにしないことをしたために、疲れているのかもしれない。ここのことひりすつと、頭を使い過ぎだ。

城門に向き直つてあたしは背筋を伸ばす。

あの向こうへ行くと、あたしは心の中で誓つた。

宿へ帰ると既にみんなは帰つていた。

「早いねー」

言いながら中に入つていつて、なんだかみんながやけに暗いことに気付いた。

「どうしたの？」

まず、松永くんが少し笑った。

「そこ、座つて。話したいことがあるんだ」

心臓が、どきんと鳴った。

あたしは助けを求めるように藤川くんを見た。けれど藤川くんはひらひらと指を動かして口許だけで笑つただけで。やよいさんはと見ると、やよいさんはかすかに目を伏せてしまつた。

しかたなく、あたしは空いた椅子に座る。

「どうしたの？」

「うん、あのね」

一瞬の、間。

松永くんは明らかに躊躇していた。

「帰る方法が見つかつた。たぶん、正解だと思つ。でも、どうする？」「慎重に、でも、歯切れ悪く、松永くんは言つた。

あたしは少し考える。

帰る方法が見つかつた、と松永くんは言つた。そう言つた。でも、どうするってどういうことだらう。

「教えるのは簡単なんだ。でも、石野さんは知りたい？」

ようやく判つた。松永くんの言葉はあたしの心にすとんと落ちた。

「ううん、いい」

大急ぎで言つた。もちろん、松永くんは判つてゐるだけだし、言って欲しくなんかなかつた。

松永くんは満足したように笑い、藤川くんは苦笑してみせ、やよいさんは溜息をついた。

「良かった」

「未緒

やよいさんが抱きついてくる。

「バカはやめて」

「でも、あたしバカだから、これはやめられなー」や

「そうそう」

藤川くんがうなづく。

「あ、ひどーい」

「本当のことだろ?」

「そつそつ。……確認する必要もなかつたんだけどね、石野さんは絶対にそつ言つと思つてたから」

「そう、言つてたもんね」

別行動宣言をした日に。

「だから、本当は言わざに行つてしまおうかと思つてた」あたしはうなづく。それでいいと思つてた。

「でも、言つておきたいことがあつてさ」

首を傾げて続きを促す。

「この半年の間、君がいたから一緒に旅ができたってのは、嘘じゃないよ。君はね、自分で気づいてないだけで、俺たちに随分いろんなヒントをくれてたんだ。もちろん、それが理由じやないけどね。でも、俺も小松も思いもよらないことを、君はいつも何気なく発見していた。君は発見したことには微塵も気づいてない。俺たちはそれを利用してたんだよ」

首を傾げたままあたしは松永くんをじつと見る。

「でもさ、そんなことを抜きにしても、君と一緒に旅がてきて良かつたと思つてるから」

やよいさんがあたしからばがれた。

「ありがとう」

やよいさんと松永くんの声が重なつた。

「お礼を言つのは、あたしの方だよ。絶対」

あたしはやよいさんを見る。それからゆっくり松永くんを見た。

「藤川くんも、松永くんも、優しいからそういうふうに言つてくれるけど、あたしがいなかつたらそれはそれで楽しい旅になつたと思うよ? あたしは」

人当たりのいい一人と、マイペースな藤川くんは、一体どれくらい折り合いをつけるだろう。三人とも頭がいいんだから、三人で

居たほうがいいことはすぐに判る筈だ。それは、始めは打算かもしれないけど、そのうちに本音が出始めて、ぶつかって、それからいい仲間になる。あたしにはそれが判る。

「想像すると笑ってしまうね」

やよいさんが妙に真剣な顔で言つた。

「実際、そういう意味でも君がいて良かつたと思つけどね」

松永くんは苦笑する。

「俺は、そういうこと抜きで、未緒に会えて良かつたと思つてるとんだけど」

藤川くんは困った顔で言つて。それから無茶苦茶素敵な笑顔になつた。

「一足先に帰るけどさ、大丈夫。うちには知恵袋が一人もついてるから。未緒の行つてる学校も、未緒の家の電話番号も住所も覚えてるから」

安心して帰つておいで。

藤川くんはそう言つた。

なんだかとつても変なセリフだつた。

朝起きたら、もう三人はいなかつた。先に帰つたんだとすぐに判つた。

藤川くんはバカだ。そう思うとなんだかとても可笑しくなつた。

一夜の夢だから、起きる時は一緒なのに。先も後もないのに。本当に判つてるのかな、あの人は。

松永くんが、帰る間際になつてあんなことを言わなくつたつてね。

やよいさんはやよいさんで、過保護だし。

そんなことを考えながらあたしは出掛ける用意を始める。あと六日。

こんなイキナリ皆が帰つてしまつとは思つてもいなかつたから、

本当は少し困つてゐるんだけど、それでもなんだか嬉しくてへらへら笑つてしまつ。なんかハメられたかな、なんて思つてしまつ。三人が先に帰ることができて、もう嬉しくてしようがないのだ。

「おや？ 他の三人は、もうとっくに出掛けたよ」

宿の一階の食堂でかなり遅い朝食をとつてゐると、宿の主人が言つてきた。

「もう昼なのに、いいのかい？」

「うん。みんなはね、先に帰つたの」

あたしはにつこりと笑う。もしかしたら、へらへらと笑つたように見えたかもしれない。

宿の主人は少し驚いた顔をした。

「帰つたつて、見つけたのかい？」

あたしは小さくうなづく。

「昨日はそう言つてたけど。今、いないつことは、そういうことだと思つうけど」

「へええ。そりやあ、すごい。あんたはいいのかい？」

「ふつふつふ。あたしはあたしの力で帰るからいいのだよ」

胸をはる。

「そりやあ、豪氣だ」

宿の主人は言葉とはウラハラに呆れたといつような顔をした。

「で、帰る用処はついたのかい？」

「うーん、それがね、ぜんぜん」

明るく言つと、さらに呆れ顔になる。

「大丈夫かい？」

「大丈夫大丈夫」

あたしがお気楽に言つと主人は判らないといつように首をひねりながら去つていつた。

食事がすんでからあたしは外に出た。行き先はあの屋上だ。

メモを見ながら一直線にあの建物に向かう。一直線といつてもあ

つちの角を曲がりこつちの角を曲がりだけど、昨日はあんなに迷つたのが嘘みたいに簡単についたから、気分はやつぱり一直線だった。とんとんと階段を昇ると、あの女の人の声が耳に聞こえた気がした。どこを見渡しても彼女はいない。

いいわよねえこい。

相変わらずの青い空。そして、正面の扉。

正面の、扉……？

どうしてだろ？。気づかなかつたあたしは充分バカだけど、どうしてあの扉は真正面に見えるんだろう。この建物は、あの扉の正面の通りの脇にあるのに。確かに、離れてるから単にそう見えるだけと言わればそうかもしね。でも。

あたしは振り返る。けれど、当然のことながら城の門は真後ろにあるわけじゃない。屋上の形をみながら角度を調節しても、うまく正面にはならない。これは、どういうことだろ？。

「扉を見ていたら、松永くんがやつてきた……」

そう。たしか、やつてきて、松永くんは扉を見ていた。城の扉と似ているつて誰が言つてたっけ……。

俺たちに随分といろんなヒントをくれてたんだ。

そう言つていたのは松永くん。

……本当、優しいんだから。

入つたら出ることはできません。

そう言つていたのは姫君。

「早いのは、入つてきてすぐだつた」

声に出す。そう言つたのはこの街の人だつたはずだ。

あたしは、門へ向かつた。

姫君は、始めから答えを言つていた。

一度入つたら出られない。その言葉をあたしは、もうこの扉は開かないといつうふうにとつていた。けれどそうでないとしたら。

この街の中で、街を見渡せるほど高い建物は一つしかない。そのたつた一つの屋上へと上がる階段が不自然な角度で門を向いているのは、なにか意味があるのではないか。

ただの統一感からの同じデザインだと思つていた門と城の扉。でも、これもなにかのヒントだとしたら……。

そして昨日の松永くん。ヒントをくれたのはあたしだと言つていた。扉を調べていた。

他に、なにが要る？

彼らは帰つたのだ。間違いないと言つていた。松永くんが、そう言つていたのだ。あの、松永くんが。

同じ答えに、あたしが辿りついているという根拠はない。もちろんそうだ。だけれども、辿りついていないという根拠もない。

あたしが思いついたことはすべて偶然かもしない。あの扉を開けて、また見当違いな所に飛んでしまうのかもしれない。でも試してみない方法がどこにある？

ダメで元々だ。

あたしは扉に手をかける。

そして力を込めて押し開けた。

入ってきた時と同じ音がする。

多分、これは、帰るための正しい道じゃなくとも、あたしのための正しい道だと。そう思えたから。

開いた隙間に足を踏み出した。

(後書き)

これもまた、結構昔に書いた作品です。
ペンギンよりは新しいですが。

過去作品で投稿するのは、おそらくこれが最後。
次は、新作でいきたいという野望を抱きつつ、気力体力の衰えをひ
しひしと感じる今日この頃なのでした：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6502d/>

迷宮の果て

2010年10月8日15時15分発行